閉会あいさつ

龍谷大学経営学部長
重本　直利

長時間、ご苦労さまでした。簡単に、まとめのようなものをして、閉会のあいさつに代えたいと思います。

最初の方で、センターの10年の歴史を簡単にご紹介しましたが、この間、大きく京都産業学センターをめぐる状況が変わったという実感をもっております。先ほどから、地元学という言葉もありまして、地域という言葉も何度も出ておりました。また、社会的企業という言葉も出ました。この10年間で、グローバル化と言いますか、グローバリゼーションが非常に進み、この間いわゆるリーマンショックもありました。この10年間の変化の中で、地域産業学を考えざるを得ないという側面が強くなってきております。センター設立の当時よりも、このことはいっそう鮮明になってきたという感じを受けた本日のシンポジウムではなかったかと思います。

菅原先生がご紹介されたように、地域というものを前提にした産業学というところだと思います。従って、地域あっての産業であり、決して、産業あっての地域ではないということであります。産業あっての地域というのは、典型例として、かつての企業城下町ということでありますが、それは、もう20世紀の遺物ではないかと思います。地域あっての産業であることを再度確認したいと思います。

幸いなことに、京都は1200年の歴史があって、龍谷大学も373年という長い歴史を有しております。この京都という地域に支えられて、各企業も産業も今日を迎えているということであろうと思います。この地域の歴史や文化は、この重みの中に京都の企業も産業もあるのだろうということです。地域あっての産業ということは、京都において、より鮮明であります。このことをいち早く捉えて、京都産業学センターというネーミングがなされ設立されたと思います。

先ほども出されましたが、横浜産業学とか、北海道産業学とか、札幌産業学があります。オホーツク学も出されましたが、オホーツク産業学でもあろうかと思います。また、地元学という言葉ですが、例えば熊本の水俣にも、

水俣学というのがありますが、地元学です。これも、21 世紀に入ってからのことです。そういう意味で、地域あっての産業ということを、あらためて考える必要が出てきていると思います。

しかし、このことは、やはり両面ありまして、グローバル化するということが、ローカル化を進めざるを得ないという、この両者の関連です。この両面が相まってバランスを保つということでしょう。先ほど白須局長さんの、バランスという意味での経済、１次産業から３次産業までですが、そういうことを考えると、やはり、いい意味でのバランスへとどう変わるのかということかと思います。このことは、二場先生の地域内循環という言葉の強調とともに社会資本の形成という言葉も、非常に感銘を受けました。こうしたものを築いていくために、個別企業なり、また中間組織の重要性のお話しをされました。あらためて京都には、中間組織、協力工場等を含めて、そういったものの本来の意味というものを、あらためて新しい形で考えていく必要があるだろうと感じております。過去には戻れませんので新しい形を強調したいと思います。

最後に、龍谷大学 373 年の歴史があると先ほど言いましたが、学生さんも知っていると思いますが、「永久に揺がぬ」ではじまる龍谷大学の学歌があります。例えば、早稲田大学の「都の西北」、京都大学の「紅萌ゆる」などがありますが、「永久に揺がぬ」というメッセージが私は好きです。龍谷大学は、柔軟な大学でありますが、それを支えているのが「永久に揺がぬ」ではないかと思います。最近、ただただ柔軟で時代に過敏に適応する大学がありますが、軟体動物のように実体がつかめなく、いったい何をやっているかも分からない大学が多く出てきています。龍谷大学には「永久に揺がぬ」があって、その上で柔軟に対応しています。これが本学の誇るべき特徴かと思います。そういう意味で、あらためて、京都産業学においても、例えば、長い歴史をもつ老舗企業の家訓、学生さんは古いと思われるかもしれませんが、そういう「永久に揺がぬ」ものがあって、そういうものを再確認しながら、時代に柔軟に適応していくという必要があるのではないかと思います。このことは、特に島津製作所に関する前田部長さんと山西先生の報告から大きな示唆を受けました。

京都産業学センターを10年前に設立した当初の一時期、混迷を深めた時期もありまして、大変だったのですが、今日こういうかたちで盛大なシンポジウムに5人の方々のご講演・報告をいただきました。御礼を申し上げるとともに、あらためて、次の10年をどうするかということを考えさせられた内容でありました。研究科長、センター長をはじめとした学内メンバーとともに学外からの客員研究員の方々も含めて、次の10年の京都産業学センターの進むべき方向性について、今日のシンポジウムから多くのヒントを得られたのではないかと思っております。引き続き、京都産業学センターへのご支援ご協力をお願いしたいと思います。

以上をもちまして、閉会のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

○司会　懇親会の会場のご案内を致しますので、学生の皆さまも、どうぞ遠慮なさらずに、ご一緒いただけたらと思います。

（終了）